

2025年度 入学試験問題

国 語

②

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
3. 問題は、問題一から問題三までです（1頁～14頁）。
4. 解答は、すべて解答用紙の指定された箇所に記入してください。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

国語

問題一 以下の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、いずれも岡田美智男『ロボット 共生に向けたインタラクション』からのものである。これらを読み、後の問に答えなさい。

【文章Ⅰ】

〈お掃除ロボット〉のふるまいについて、もう少し詳しく見ておこう。

ひとまずロボットの電源ボタンを押してみる。すると一瞬あたりを見まわし、なにか狙いを定めたかのようにして、まっすぐに進みはじめる。部屋の壁などにぶつかり、それ以上は進めないと判断するや、すかさず身体をクルリと回転させ、壁にその背中を押されるように、新たな方向へと動き出す。あるときは椅子やテーブルの脚などにぶつかり、ぶつかりしながら、小刻みに進行方向を変える。なにを思っただ、ふと立ち止まり、今度は反対方向に進みはじめることも。「風のふくまま、気の向くまま……」とは、このことだろう。

どこか行き当たりばったりに見えるけれど、これはこれで理にかなっているようだ。部屋のなかの椅子やテーブル、床の上に無造作に置かれたモノたち、これら実環境において想定されるすべての事態に対して、あらかじめプログラムのなかで備えておくのは現実的ではない。それに周到に準備されたプランでは、どこか独りよがりな行動を生みやすく、柔軟性を欠いてしまう。そこで「自らの力だけでなんとかしなければ」という拘りを捨てて、いくつかの選択肢を残したまま、まわりに半ば委ねてみる。そうした姿勢がまわりの強みを引き出し、味方にしてしまうようなのだ。

まずクローズアップしたいのは、部屋^Bの壁の意外な働きである。「部屋の壁にぶつかり、それ以上は進めない」など、ロボットの進行を妨げていた張本人でもあるけれど、見方を変えるなら、ロボットの運動自由度の一部を制約し、次の動きを方向づけてもいた。「これ以上は進めないから、今度は向こうの方に進んでみたら……」と、アドバイスでもしているかのようである。

自らの判断だけで「部屋のなかを自在に動きまわっている」ように見えただけでも、こうした機能がすべてプログラムのなかに作り込まれていたのではない。その動きの一部は、ロボットの行き当たりばったりな行動様式とその一部を制約する部屋の壁との連携から立ち現れたものだろう。

あらゆる情報を抱え込み、自らの判断だけで行動するのではなく、「この部屋のことは、この壁に聞いてみたらいい」ということだ。どうなってしまうかわからないけれど、せつかなので、まわりに半ば委ねてみる。ロボットにとって、自らの制御の一部を手放すのはリスクも伴う

ことだけれど（現に玄関の段差から落下し、そのまま力つきてしまうこともある）、「全部、自分で！」という拘りを捨ててみると、そこに軽快さも生まれる。くわえて、「ロボットの制御の一部をなんと部屋の壁が担ってくれた！」というように、まわりの意外な働きを引き出すのである。

テーブルや椅子の脚、ソファ^Aなどの「障害物」とのかかわりはどうだろう。これらもロボットが自在に動きまわる上で、その妨げとなるものだけれど、どうも様子が違う。ソファの縁、無造作に置かれた椅子など、それらと絡むようにして、ちゃっかり新たな進行方向を見だし、部屋のなかをまんべんなく動きまわる。床の上のホコリを取りこぼすことなくお掃除できるのは、ロボットの行き当たりばったりな行動様式と無造作に置かれた椅子との連携によるものかもしれない。そんなふうに見えてみると、なかなかおもしろい。目の前の「制約」や「障害」とうまく対峙し、それらをチャンスに変えてしまう。「まあ、偶然が味方をしただけではないか」との見方もあるけれど、周到に準備されたプランに基づいて行動しては、こうした偶然の出会いはなかなか生かせないのだ。

〈お掃除ロボット〉の行き当たりばったりに見えた行動、それは「こっちは進めるんだろうか」と自らの行為の可能性を探りつつも、「なにか使えるものはないか」とまわりにある手掛かりやその働きを探ろうとするものだ。それとて、ロボットのなかに明確な意識があったとは思えない。その身体のないげない、まわりに半ば委ねたような行為こそがもたらしたものだだろう。

〈お掃除ロボット〉は、「どのような場所で動作させているのか」により、そのふるまいに対するわたしたちの印象も変わってしまうことがある。それはどういうことだろう。

例えば、ロボットを体育館のような広いところで走らせてみる。シンプルで平坦な環境にあつては、その進行を妨げるものもなく、ただまっすぐに進み続けることだろう。まわりとの接触機会も少ないためか、わき目もふらずに、プログラムに従ってひたすら動くだけ。どこか閉じた〈機械〉をイメージしてしまう。ひたむきだけれど、融通が利かない。洗濯機の「お任せモード」と同じで、「まあ、あとは任せたよ！」と、少し距離を置きたくなることだろう。

もう少し小さな部屋のなかでの動きはどうか。部屋の壁にぶつかるたびに、「しょうがないなあ」とばかりクルリと回転し、次の方向へとまた進みはじめる。反射的でシンプルな動きにもかかわらず、どこか生き物のようににも感じられるのだ。

このときロボットが〈物理的な身体〉を備えていることの意味は大きい。ある場所を占め、その動きには向きがある。「部屋の壁にぶつかる」と、それ以上は進めない。仕方なく、その向きを変える」のは当たり前なことだけれど、それだけで親近感を覚えてしまう。モノにぶつかって弾かれる動きとも、プログラムのようなもので作り込まれた動きとも違う。行き当たりばったりにもかかわらず、なにか探し物でもしているかのように映る。「どこに向かおうとしているの?」と、その動きを思わず追いかけてしまうのである。

普段、わたしたちは「よもや機械に心が宿ることはあるまい」と考えている。それでも、目の前のロボットのふるまいの意味を解釈し、その

動きの先を予測するとき、そこに物理的な法則やプログラムの存在を仮定するだけでなく、「その背後になんらかの意図があり、それに沿って合目的にふるまっているのではないか」と捉える方がしつくりくすることもある。これはダニエル・デネットの指摘した「志向的な構え」と呼ばれるものだろう。

テーブルや椅子の脚などに囲まれたところでは、ロボットの動きもせわしくなる。複雑な環境がロボットのセンサやアクチュエータに頻繁に活躍する機会を与えているのだ。それでも、わたしたちの目には、このロボットが「いろいろなところに目をくばりながら甲斐甲斐しく働いている」ように映る。あるいは袋小路に入り込んでは、そこから這い出そうと慌てていたり、なんとか出口を見つけて、ホッとしたように動き出す姿などに、思わず自分を重ねてしまう。どこか他人事には思えないのだ。

部屋の隅にあつては、コッソコッソと壁に沿うようにして丹念にホコリをかき集める。その仕草がなかなか健気でかわいい。そんなとき、ちよつといたずらをしてみてもおもしろい。その動きを足でふさごうとすると、「ちよつと、お掃除のじゃまをしないでよ!」と小突いてくる(ようにも思われる)。左右に小さく身体を揺らしながら、その場から逃れようとする。それはとても迷惑そうな仕草として映るのだ。

先ほど、広い空間にあつてはどこか融通の利かない「機械」に見えた。乱雑にモノが置かれたところにあつて、それらにぶつかり、ぶつかり移動する姿はどこか「X」のようでもあり、甲斐甲斐しく働く姿にも映った。ちよつといたずらしながらかわつてみると、それに気づいてなのか、足をツンツンと小突いてくる。その動きは、わたしたちに向けられたもののように思われ、わずかながら「ソーシャルなかわりのようなもの」も感じるのだ。

これらは大いなる錯覚なのだろうか。ロボットを取り巻いている環境の変化によって、そのふるまいも変わる。わたしたちの構えにも影響を及ぼすことで、ロボットを取り巻く環境は、物理的なものから、わずかに「Y」な性質を帯びるものとなる。それはロボットのふるまいの質をまた変化させることだろう。

【文章Ⅱ】

外から帰ってきたばかりなのだろうか。子どもがとてうれしそうに、今日の楽しかった出来事をお母さんに伝えようとする。

「きょうね、いっぱいあそんだ!」(えっ、だれと?)

「そらちゃん」(へえ、なにしてあそんだの?)

「おえかきした!」(あー、そうなんだ!)

「ひなちゃんもいっしょ」(へえ、たのしかった?)

「うん」……

こうした発話に思わず心惹かれてしまう。ぼつり、ぼつりと、不完全で言葉足らずなところもあるけれど、まわりからの手助けや解釈を上手に引き出しながら、なんとかおしゃべりを続けてしまう。過不足なくしっかりと話せる子どもの発話とくらべても、この言葉足らずな発話でのやりとりが、むしろ豊かなコミュニケーションを生み出しているようなのだ。これはどうしてなのかと思う。

「きょうね、いっぱいあそんだ!」という発話は、「きょう楽しかったことを、ひとまず伝えておこう!」との思いが先走って、あるいは「その他のことは、適当に解釈してくれるだろう」との期待もあつてのことか。この断片的な発話も、結果として相手に「半ば委ねる」、あるいは相手に「聞いている」性質を伴うものだろう。

自らのなかで完結させずに、相手に聞いた発話に、聞き手も思わず身を乗り出してしまう。つい引き込まれ、「だれとあそんだのか」「どんなことをしてあそんだのか」と矢継ぎ早に尋ねてしまう。そんな聞き手の関心や助け舟に支えられるようにして、「そらちゃん(とあそんだ)」

「おえかきした」といった情報が少しずつ引き出されていく。

「きょうはね、幼稚園でね、そらちゃん、ひなちゃんと、みんなでおえかきしてあそんだ。楽しかったよ!」と、今日の楽しかった出来事を一方的に伝えるはずの発話は、いつの間にか、聞き手との協働の作業となっている。話し手の伝えたい思いと聞き手の関心とが上手に絡まり合っ、会話連鎖が組織されていく。話し手と聞き手との間で情報を伝え合うというより、話し手と聞き手との相互行為ループのなかで「ひとつのシステム」を作り上げ、今日の出来事や気持ちを共有し合うようなのだ。

注1 ダニエル・デネット……一九四二〜二〇二四年。アメリカ合衆国の哲学者、著述家、認知科学者である。心の哲学、科学哲学、生物学の哲学などが専門であり、その中でも特に進化生物学・認知科学と交差する領域を研究していた。

注2 センサ……センサ。さまざまな種類の物理量を検知、検出したり、判別、計測する機能を備えた装置のこと。

注3 アクチュエータ……駆動装置のこと。

注4 相互行為ループ……お互いにやり取りする行為が繰り返して実行されること。

問一 空欄 、 に当てはまる適語を本文中より抜き出さない。ただし、空欄 は三字、空欄 は五字で答えなさい。

問二 波線部 i、ii の語句の意味として最も適当なものを、それぞれア～エから選り記号で答えなさい。

- i 周到に……………ア 丁寧に繰り返すさま
イ 個別に確認するさま
ウ 手ばかりがないさま
エ 十分時間をかけるさま

- ii 甲斐甲斐しく…ア 辺りを無駄なく動き回り、一生懸命であるさま
イ 動作がきびきびしていて、手ぎわ良く動くさま
ウ 動きや仕草にかわいらしさや人間味があるさま
エ 周りに気を配りながら仕事を真面目に行うさま

問三 傍線部 A「お掃除ロボット」のふるまい」とあるが、その様子が簡潔にまとめられている部分を、文中から十字以内で抜き出さない。

問四 傍線部 B「部屋の壁の意外な動き」とあるが、筆者はどのような点について「意外」と考えているのか。三〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部 C「ロボットを取り巻いている環境の変化によって、そのふるまいも変わる」とあるが、どういふことか。その内容の説明として最も適当なものを、ア～エから選り記号で答えなさい。

- ア 広い場所では、プログラムされた機械のようだが、狭い場所では、障害物に応じて方向を変える生き物のような動きが感じられる。
イ 広い場所では、融通を利かせながらひたむきに動き回るが、狭い場所では、障害物に邪魔をされ融通が利かない動きが感じられる。
ウ 広い場所では、私たちとのかかわりが見られないが、狭い場所では、障害物に対してではなく、私たちへの働きかけが感じられる。
エ 広い場所では、障害物がないので自由に生き物のように動き回るが、狭い場所では障害物に制限された機械的な動きが感じられる。

問六 傍線部 D「この言葉足らずな発話でのやりとりが、むしろ豊かなコミュニケーションを生み出しているようなのだ」とあるが、筆者は、「言葉足らずな発話」のどのような点が「豊かなコミュニケーション」を生み出していると考えているのか。三十五字以内で説明しなさい。

問七 傍線部 E「聞き手との協働作業」とあるが、【文章 I】に共通の性質をもつ内容が読み取れる。その内容の説明として最も適当なものを、ア～エから選り記号で答えなさい。

- ア 壁やテーブル等の「障害物」に掃除すべき場所を指示されることで支えられながら、進む方向を見出し掃除ができていくこと。
イ 壁やテーブル等の「障害物」に進む方向を制限されながらも、障害物を避けながら掃除する場所を見出して掃除をしていること。
ウ 壁やテーブル等の「障害物」にぶつかることでそれらの存在と働きを確認しながら、邪魔にならないように掃除をしていること。
エ 壁やテーブル等の「障害物」に自らの行動の判断を委ねながらその働きを引き出し、それらと連携しながら掃除をしていること。

問題二 以下の文章を読み、後の問に答えなさい。ただし、設問の関係で一部書き換えた部分がある。

一九九〇年四月の初めに、わたしはインドのコモリン岬（カニヤ・クマリ）にいた。コモリン岬はインド亜大陸の最南端で、朝はベンガル湾から陽が昇り、昼はインド洋を陽が渡り、夕方はアラビア海に陽が沈む、という場所である。

ある朝わたしは、そのベンガル湾から陽が昇るときに立ち会おうと、暗いうちから磯に出てみた。ごつごつとした岩場みたいな足触りの岸に、漁船がたくさん上げられて休息している。目がなれてくると、一つ一つの漁船の陰に、二つとか三つ、布にくるまって眠っているような人間がいる。それからまた別の漁船の向こうでは、いくつもの目が息をひそめてわたしを見守っているように感じた。

東の雲のすきまから朝の最初の陽の光が一条射るようにさし渡ってくると、岩肌はいっそう黒々と陰影を見せて立体を立ち上がらせるが、向こうの海は紫や朱や、黄金色や緑を点滅する刻々の変幻を開始している。遠い変幻に吸い込まれるみたいに岩場を渡って行くと、不意に激しく切迫した、ほとんど金切り声みたいな人間の声聞こえる。声はいくつもの声と重なって、言葉の意味は分からないが、わたしにそれ以上先に行つてはいけなと叫んでいることだけは分かった。暗がりはいくつもの目が光って近づいてくる。

ちの目であると、それから別の漁船の向こうからわたしを見ていた目であると、わたしは思った。〔聖域〕があるな、とわたしは思った。人間が立ち入ることのできない、少なくともわたしのような異教の人間が立ち入ることを許されていない、〔聖域〕があるな。あの切迫した金切り声のような制止の声は、彼らにとって大切な〔聖なるもの〕を、守る声だな。

Ⅱ わたしが想像したことのうちには、昨日の経験があった。

「コモリン岬」という、外の世界に知られている英語の地名は、「クマリ」という現地の言葉のイギリス人風のなまりで、クマリとは少女、特にここでは神話の中の、生命の源泉ともいべき聖なる少女である。岬の先端にはこの少女を祀る聖所があって、インドの各地から訪れてくる巡礼者たちの信仰の対象である。参詣する男性たちは上半身裸となければならないが、それはこの少女神が男性の裸体を好むからであり、男たちはすべてその身体を少女神への捧げ物として礼拝を遂げる。胎内のように暗い空間をひしめき合う精子のように男性たちの群れにまじって本尊に達し、もういちど一気に明るい熱帯の陽射しの下に出ると、いきなり現代の巨大な政治的プロパガンダの図像が競い立っているという、何とも超現実主義的なトリップであった。

とにかくその土地の信仰を大切にすることとは、旅する者の大切な心がけ第一条だから、わたしは現代人間として釈然としない気持ちはあったが、その地点から先に踏み込むということをしなかった。

わたしが足を踏み入れるつもりがないことがわかったと、金切り声は止んで、一転して屈託のない明るい声があちこちから話しかけてきた。明

るくなってきた光の中で見ると、みんな一〇代の前半くらいの男の子たちだった。思ったとおり、さつきまで漁船の陰でころがって寝ていた子どもたちである。家の中で寝るよりも気持ちがいいのだという。彼らはわたしがそれ以上足を踏み入れなかったことに、ほんとうに喜んでいて。けれども理由は、わたしが想像していたものとは全然ちがった。

わたしが立っていた場所のもう一歩先は、突然の淵になっていて、どのくらい深いかわからなかった。そういう場所は他にもあって、彼らはわたしがどんと歩いて行くので、どきどきしながらずっと見ていたのだという。よかった。と、彼らは口々に言って、くり返しうれしそうにうなずいてみせた。

Ⅲ いろんなとりとめのないことをネタに、結局その朝は陽の高く昇りきるまで、わたしはこの底ぬけに気のいい少年たちとふざけ合い、笑い合つてすごした。わたしがカメラをもっている事を見つけると、ひしめいて写真を撮ってくれとせがんだ。下の写真はそのひとつである。意味もなく無為に過ごした朝だったのだが、ふしぎに忘れることのできない一日となった。

人に話しておもしろいような「事件」は何もないから、旅の話をするようなときも、この日の話をすることはなかった。「現代社会の比較社会学」という主題で話をするときに、伝えようとしたこと

の核心、「数値にならないもの」、「言葉にならないもの」の次元の存在ということにふれるとき、思い起こされているいろんな情景たちのひとつに、いつもこの写真の子どもたちと、この朝の記憶とがあったけれども、意味のない予感の切れはしみたいに、話の中からは削除されていた。一五年もたつて、二〇〇四年の一二月になって、突然この朝の経験の「意味」が、くっきりとした立体のようにわたしの中で立ち上つてくるということがあった。

二〇〇四年一二月の「スマトラ沖大地震」は、南インド一帯を襲う空前の津波となつて、とりわけ東海岸の漁村漁村に壊滅的な被害を与えた。日本人の行かないカニヤ・クマリについての報道は何もなかったから、インターネットで地域の現況を検索してみると、一件だけカニヤ・クマリのレポートがあった。

ヴィヴェーカーナンド・ロックというカニヤ・クマリの沖合の岩場の上に、数百人の旅行者たちが津波のために取り残された。救助に向かったインド空軍のヘリコプターも、数回の「出撃」の試みの末に結局救助を断念し、水と食料を投下するほかは手の下しようもなかった。このとき一〇人以上ものカニヤ・クマリの漁師たちが、高潮の逆巻く海に生命の危険を賭して小さい漁船でくり返し乗り出して行き、五〇〇人以上



の旅行者たちの生命を救った。「私たちが今日生きているのは、この土地の漁師たちのおかげです」と、プーナからの旅行者は証言している。取材した記者に漁師の一人は、「助けを求める人たちがいる。やるしかないでしょう」と答えている。

一五年前のあの底抜けに屈折のない少年たちは、今立派な漁師たちになっている年頃である。写真の少年のうちの幾人かは、この果敢な行動に加わっていることはまちがいないと、わたしは思う。「やったな。あいつらー」わたしは自分の身内のことでもあるように誇りに思った。もちろんわたしにそんな権利など何ひとつないことは分かっているのに。それでもうれしくて仕方がなかった。大人になったら失われる、というこのない〈きれいな魂〉というものがある。〈きれいな魂〉の生きつづける世界というものがある。この世界を行動によって再生産し、守りつづける人びとがある。

一五年前、現代人間の感覚からすれば「何の関係もない」ひとりの旅の人間の、勝手な独り歩きを危険から守りぬくために、あんなにも金切り声を上げ、夢中で制止した少年たちの声は、やはりひとつの〈聖域〉^Wを、守りとおす声であつたのではないか。失われてはならないひとつの〈世界〉の存在を、守りぬく声であつたのではないか。少年たちの精神はそれを意識しないが、少年たちの身体がそれを反応してしまう。身体は精神よりも真正である。この〈聖域〉は、けれども区切られた聖域ではない。排除するための聖域ではない。全世界にひろがつて行くこともできる聖域である。わたしたち自身の方でそれを拒否しているのでないなら。

(真木悠介「コモリン岬」より)

注1 コモリン岬……インド大陸の最南端にある、ヒンドゥー教徒の聖地として知られている。カニヤークマリ。

問一 空欄ⅠⅢに当てはまる適語を、それぞれア～エから選り記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

ア そのように イ それから ウ それでも エ それは

問二 傍線部A「わたしにそれ以上先に行つてはいけな」とあるが、筆者は「行つてはいけな」と理由を、どのように考えているか。本文から最も適当な六〇字以内の一文を抜き出し、最初の五文字を答えなさい。

問三 傍線部B「彼らにとって大切な〈聖なるもの〉」とあるが、筆者はそれを何だと考えているか。本文から七字で抜き出しなさい。

問四 傍線部C「彼らはわたしにそれ以上足を踏み入れなかつたことに、ほんとうに喜んでいた」とあるが、それはなぜか。その理由を三〇字以内でわかりやすくまとめなさい。

問五 傍線部D「この朝の経験の『意味』」とあるが、筆者はその「意味」をどう考えているのか。その説明として最も適当なものを、ア～エから選り記号で答えなさい。

ア 一歩先は断崖の淵にいる私を金切り声を上げ制止してくれた、気のいい少年たちとふざけあい、笑い合つて過ごしたということ。
イ 気のいい少年たちは、漁船の陰や向こう側で寝ているホームレスであり、現実社会ではつらい思いをしている存在だということ。
ウ 失われてはならない〈きれいな魂〉の生きつづける世界の存在を行動によって再生産し、守ろうとする人びとに触れたということ。
エ 〈聖なるもの〉を守るために、自分の命を危険にさらして行動する少年たちの姿は、現代人間の私には理解できないということ。

問六 二重傍線部V、Wの「〈聖域〉」とは、どういうことを表しているか。その説明として最も適当なものを、それぞれア～オから選り記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

- ア 「クマリ」信仰を失わずにいるコモリン岬の人びとのこと。
- イ 失われてはならない〈きれいな魂〉の生きる世界のこと。
- ウ 少年たちとの記憶にあった、無意味な予感の切れはしのこと。
- エ 津波のために、旅行者たちが取り残された沖合の岩場のこと。
- オ その土地の信仰にとって大切に守るべき聖なる空間のこと。

問七 次の会話は、この文章を学習した生徒たちが、波線部「『数値にならないもの』、『言葉にならないもの』の次元の存在」について話し合った場面です。会話を読み、後の設問に答えなさい。

生徒A 「『数値にならないもの』、『言葉にならないもの』の次元の存在」って、どういうことだろう。

生徒B 社会学者である筆者が専門分野の「現代社会の比較社会学」の話をするときに「伝えようとしたことの核心」が、それだと書いているよ。

生徒C その「伝えようとしたことの核心」を、この文章に書いたということだね。

生徒A それは、この少年たちの時を隔てた二つの行動にあらわれている。一つは X こと、一つは Y ことだ。どちらにも〈聖域〉という語が使われている。

生徒B 「彼らにとって大切な〈聖なるもの〉」という言葉もある。この〈聖なるもの〉が、「数値にならないもの」「言葉にならないもの」じゃないのかな。

生徒C そうであるなら、〈聖域〉とは、「数値にならないもの」「言葉にならないもの」の次元にあるものだよね。でも、それだけでは、まだはつきりしない。

生徒A 筆者は、〈聖域〉をどう捉えているのだろうか？

生徒B 前半部分では、「その土地の信仰」にとって大切なものではあるが、わたしは「異教の人間」というスタンスだ。

生徒C でも、後半では違っている。それは、「大人になったら失われる、ということのない〈きれいな魂〉」の「生きつづける世界」であり、その世界を「行動によって再生産し、守りつづける人びと」だと書かれている。宗教や文化の違いは、前提になっていない。

生徒A つまり後半部分での〈聖域〉とは、〈きれいな魂〉の生きつづける世界のことなのかな。

生徒B 筆者は、それを「区切られた聖域ではない。排除するための聖域ではない。全世界に広がっていくこともできる聖域」とも書いている。

生徒C Z 限定された〈聖域〉ではなく、世界に広がる聖域という意味を込めているのかもしれない。

先生 みなさん、とても有意義な話し合いができましたね。〈きれいな魂〉とは何なのか、研究者である筆者が「伝えようとした核心」は何なのか、文末の「わたしたち自身の方でそれを拒否しているのでないなら」の言葉の意味するところなど、考えるべきことは他にもたくさんありそうです。答えを見つけることより大切なのは、考え続けることです。この文章が、みなさんの「考え続ける」糧になることを願っています。

① 空欄 X、 Y に当てはまる適当な内容を、それぞれ本文の言葉を使って二五字以内で答えなさい。

② 空欄 Z に当てはまる最も適当な表現を、ア～エから選り記号で答えなさい。

- ア 「コモリン」は、生命の源泉ともいうべき聖なる少女のことだね。
- イ 生命の大切さは、どこの世界でも同じだからね。
- ウ 文章の最後の部分の「聖域」には、へ～がついていないね。
- エ 子どもの純粋さは、世界中どこでも変わらないということだね。

問題三 次の問にそれぞれ答えなさい。

問一 次のⅠ～Ⅳの傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれア～エから選り記号で答えなさい。

- Ⅰ 多くの時間をツイやした
- ア 関係者だけのヒ密が守られる
- イ 毎日の残業でヒ労がたまっている
- ウ 石ヒに刻まれた文字を読む
- エ 生産者は消ヒ者のことを考える
- Ⅱ 城の修復には義援金がジユウ当された
- ア これからのジユウ点目標について話します
- イ ジユウ剣の取り扱いに慣れているわけではない
- ウ 旅行に備えバッテリーのジユウ電をしておこう
- エ ジユウ滞に巻き込まれて遅くなった
- Ⅲ この条件にすべてガイ当する人などいない
- ア 選挙のためにガイ頭演説を行っている
- イ 当ガイ施設に宿泊するお客様専用の駐車場
- ウ プロジェクトのガイ要を説明してほしい
- エ この資料はガイ部の人には見せられない

問二 次のⅠ～Ⅲの傍線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- Ⅳ リ益優先から社員の生活重視へ経営方針を変える
- ア 複雑な社会だからこそ真リを追求したい
- イ せっかくの機会なので彼の郷リを訪ねてみた
- ウ 政治の問題と経済の問題を分リする
- エ 多くの関係者のリ害関係が一致する

- Ⅰ 店舗の詳細は裏面に書いてあります
- Ⅱ 失敗を恐れず果敢にチャレンジする
- Ⅲ たまには少し贅沢をしてみよう

問三 次のⅠ～Ⅲの傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- Ⅰ 電気自動車のハンバイは増加している
- Ⅱ 電子書籍にはない、雑誌のフロクに惹きつけられる
- Ⅲ 人里離れた温泉街にもそれなりのカンラク街はある

国語

問題一

[illegible]

問題二

[illegible]

問題三

問 三	問 二	問 一
I	I	I
		II
II	II	
		III
		IV
III	III	

学 科 名	受 験 番 号	氏 名	総 点